

おぢいさんのランプ

昨日の研究授業、窪山先生ありがとうございました。「話し合い」が子ども同士の話し合いになっていて、ノートに自分の考えがしっかり書いてあって、本校の研究テーマにせまるとてもいい授業だったと思う。

新美南吉のことを調べていて、「おぢいさんのランプ」が目にとまり、久方ぶりに読んでみた。巳之助じいさんが孫の東一に昔のことを語るお話しで、あらすじはこんな具合だ。

巳之助は父も母も身寄りもなく、よその家の手伝いや子守り、米をつくなどの仕事をしてくらしていた。食べるのがやっとのくらしで、一生をこのままで送るわけにはいかないとは思っていたが何のあてもなかった。ある時、人力車曳きから先綱曳を頼まれて隣町に行った。そこで生まれて初めてランプを見た。暗闇を明るく照らすランプにひかれ町中を歩いた。そして、一軒のランプ屋を見つける。巳之助は先綱曳の駄賃の一五銭でランプを買おうとしたがまるで足りない。自分の身の上を話し、ランプ売りになりたいから卸値で売ってくれとかけ合うと、店主は巳之助のせつぱつまった思いに心を動かし一五銭でランプを売ってくれた。行燈しかなかった巳之助の村でランプは次々と売れ、巳之助は自分の家を建て、家庭を持ち子どもも二人生まれた。順調に商売が続くと思われたが、村に電気が通ることになった。電燈がともればランプは売れなくなる。自分の商売がたちゆかなくなることを逆恨みして、巳之助は電気を通すことを決めた区長の家放火することにした。夜、藁ぶきの牛小屋に火をつけようとした。あいにくマッチが家になく、火打の道具をカチカチ鳴らしたが音だけで火はつかない。そして、「古くせえもなあ、いざというとき間にあわねえだなあ。」と思わず口にした自分の言葉に我に返る。家に取って返した巳之助は売り物のランプ五十個を半田池のほとりの木につるし、一番大きなランプめがけて石を投げた。パリンという音とともに明りが一つ消えた。次に大きなランプめがけて石を投げ、また一つ明りが消えた。そして、巳之助はランプ屋をたたんだ。

若い時に読んだが、いいお話しだなあという程度の気持ちしかわかなかった。この歳になると巳之助の気持ちがよくわかる。みんながハイブリッドだ、自動ブレーキだと言っている中で、オンボロトラックにこだわり、いまだにマニュアルミッション車にしか興味を示さない私は巳之助と同じだ。車などは各人の嗜好の問題で他人の害にはならないが、学校で働くと言う仕事にこの考え方が入り込むとそうはいかない。「時計の針を止めてはいけない。」と同僚相手によく口にした。新しいものは、その手法に飛び込んで身をさらさなければ習得することはできない。従来の古い自分の考え方に浸かったまま、新たなものを眺めてもその新しさを手にすることはできない。

ともすれば時計の針が止まりそうな今の自分を思う時、巳之助の無念さが心にしみた。